

SUNSHINE

第63号 2012年 4月発行
 有限会社 太陽開発
 鹿児島市荒田2丁目43-19 TEL099-255-3623
 E-Mail master91@taiyou1991.com
 URL http://www.taiyou1991.com/



太陽開発

検索 クリック!!

賃貸マンション(オーナー様)をご紹介します!

今回ご紹介する“パークサイド城西”は鹿児島市内でも人気のある文教区(城西1丁目)にあり鹿児島中央駅(アミュプラザ)まで徒歩約12分と生活するには非常に便利な場所にあります。オーナーの富満様は元々串木野市の出身なのですが、お仕事の関係で平成5年当時、原良町にお住まいになっていました。その後8・6水害を経験したのを機にお子様が城西中に通っていたので、どこか土地がないかと探していたら、この城西に土地を見つけ、ご親戚の羽島建設の薦めで、ご自宅兼賃貸マンションとして平成7年に建築されたそうです。南向きのお部屋は明るく、間取りも単身者に人気の1DKでシステムキッチンや屋根付駐車場があり、長く住まわれる方の多い物件です。現在は福岡にお住まいで、ご自宅の2階部分も賃貸に募集を出しましたが、おかげさまで即入居が決まりました。なかなか空室の出ない人気物件です!

オーナー 富満様



今月の10日と11日は社員みんなで熊本へ研修旅行へ行ってきました。旅行のスケジュールは「湯布院→黒川温泉→熊本城」という流れで、レンタカーを借りて1泊2日の旅でした。まず、湯布院で昼食をとり、その後、お土産屋さんがたくさん並んでいる街を散策しました。大分と言ったらやっぱり『鶏天』ですよね! はい!! 頂きました(笑) 名物と言うだけあって、いろんなお店で売っていました。私は初めて知ったのですが、他の名物として『黄金コロッケ』というのもありました。先輩は食べていたのですが、私も食べればよかったと後悔しています(涙)その後は黒川温泉に向かい『優彩』という旅館に泊まりました。とても綺麗な旅館で温泉もたくさんありましたよ。『黒川温泉』と言えば「温泉めぐり」ですよね。私も夕食後に行こうとしたら、時間的に他の旅館の温泉に入れない時間になってしまい、部屋に戻りみんなで『トランプ大会』を焼酎を呑みながら楽しみました(笑)

2日目は当初、『阿蘇山』に行く予定でしたが、天気が悪く、『白川水源』に行き、その後高森の田楽の里で昼食をとって『熊本城』へ行くことになりました! 古い建物や神社、お城などを観るのが好きな私は車の中でウキウキしながら寝てました(笑)目が覚めて『熊本城』に着いた時には天気もすっかり回復して汗ばむくらいの気温でした。私、今回の旅行で一つだけ心残りがあって、熊本城の天守閣を上った後、一人で本丸御殿を観ていたら突然電話が鳴り、「次の場所に行くから帰っておいで」と…。まだ1/3も観てなかったのに(涙)

次の連休にリベンジしたいと思います!!

今回は枠の関係上、旅行の流れしか書けませんが機会があれば、内容まで書きたいですね(笑) みなさんも是非、『熊本城の本丸御殿』をご見学してみてください! ちらっとしか観てませんが観る価値はあると思います! [守屋]



とり天



白川水源

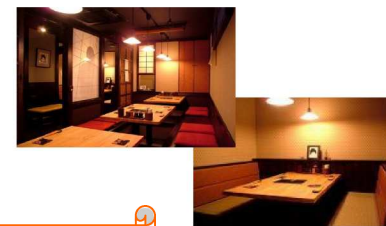


熊本城



本丸御殿

炭火焼 とり一番



人気のカウンター席



地頭鶏の炭火焼



だし巻き玉子



地頭鶏刺し身盛り

今回ご紹介するお店は、騎射場電停から徒歩1分。市電通り沿いにある「とり一番」さんです。こちらの内装は、インテリアデザイナーであるオーナー松田さんが和イメージして手掛けたもの。ゆったりとくつろげる半個室風のテーブル席と、常連さんに人気のカウンター席があり、お一人様から楽しめる空間となっております。こだわりの宮崎県産の地頭鶏(じどっこ)を使用した料理には、新鮮な地鶏の刺し身盛り、定番メニューの地鶏の炭火焼、女性に人気のだし巻き玉子などなど…。当社社員にも大好評で美味しくお酒も頂きました!!野菜たっぷりの鶏しゃぶなどほかでは食べられないメニューなどもありますので必見です♪。仕事帰りに来られる方も多く、最大20名様まで入ることが出来ます。予約なしでは入れないこともあるので、ご来店の際はご予約されますことをおすすめします!(永吉)

鹿児島市荒田2丁目76-12

電話 099-255-1019

営業時間 18:00~24:00
 定休日: 日曜日



今月の一冊 No.62

百寺巡礼 海外版

インド 五木寛之



ブッダ最後の旅を辿る、長い道のりが始まる。八十歳を迎えたブッダの教えを、インドの人びとはどう受け継いだのか。マンゴーの樹の下や、ガンジスのほとりに彼の最後に見た景色が今も息づいている。

人生最後の旅に出たブッダは、インドという地で仏教の種をまいた。民衆の土壌と時間がそれを育み、仏教という大樹ができたのだらう。21世紀、仏教はどこに行こうとしているのか。

1932年福岡県生まれ。朝鮮半島より引き上げたのち、早稲田大学露文科に学ぶ。PR誌編集者、作家、ルポライターなどを経て、'66年『さらばモスク愚連隊』で小説現代新人賞、'67年『蒼ざめた馬を見よ』で直木賞、'76年『青春の門』(筑豊篇ほか)で吉川英治賞を受賞。'81年より一時休筆して京都の龍谷大学に学んだが、のちに文壇に復帰。2002年にはそれまでの執筆活動に対して菊池寛賞を、'04年には仏教伝道文化賞を受賞する。代表作に『戒厳令の夜』『風の王国』『風に吹かれて』『百寺巡礼』(日本版全十巻)など。小説のほか、音楽、美術、歴史、仏教など多岐にわたる活動が目立っており、2010年に刊行した『親鸞』はベストセラーとなった。

さて、前回に続きインドに関する本です。前回は『ゴーゴーインド』と言う、バックパッカーの視線で書かれた本でした。ふしぎの国インドの魅力にもっと触れてみたくて、今回は1月号でも紹介した五木寛之の『百寺巡礼・海外版』の『インド』を取り上げてみました。(ちなみに1月号はブータンでした)

仏教は2500年前、インドで生まれましたが、現在のインドの仏教徒の数は全人口の0.7%にすぎず、80%以上がヒन्दゥー教、10%あまりがイスラム教、その他がジャイナ教、ゾロアスター教で、仏教はそれらの諸派よりさらに少ない、とみなされているらしいのです。

五木氏は、“インドはじつに興味深い国である。いきいきしている。人を惹きつけるものがある。ひろびろとして、ふかく、たまげるほどゆたかである。自然や風土もそうだが、まずなにより人間だ。人間たちがすごい。いろんな意味ですごい”と表現されているが、本書からは、大らかにゆったりとした奥深さを感じられます。それはブッダ視線で書かれているからなのでしょう。

インドは見る角度で全く違う印象を受ける国なのでしょう。そんな訳で、今回はまた別の視線からインドを見てみることにしますので、お楽しみに!